

3月ジャーナリズムの中で、ニュースは何を話し・語り・伝えてきたのか —東日本大震災・テレビ報道アーカイブにおけるメタデータの語用論—

加藤 徹郎*

1. はじめに

本稿は、テレビ・アーカイブのメタデータを分析対象としながら、東日本大震災におけるテレビニュースの報道が、過去5年という期間を通じてどのように変化したのかを問うものである。2011年の震災以来、もうすぐ6年が経とうとしている。この間、テレビ各局は様々な内容・形式で震災の経緯を映し出してきた。対して視聴する側も、録画機器の進化によって、個人で番組を全録することも可能になったし、またそうした全録機を駆使しながら、多量の番組の保存・収集を行っている各種研究機関・団体もある。こうした背景から、これまでは保存に限界のあったテレビ映像をアーカイブしていくことの意義は、震災以来盛んに議論されており、またアーカイブに付帯するメタデータを利用した計量的調査も、多く行われている⁽¹⁾。

一方、この6年という期間で、震災に対する「風化」の問題も、様々なところで指摘されている。例えば山田健太は、震災5年目の節目における論考の中で、テレビ各局の人員削減、取材拠点の減少を背景とした「情報の偏在」を指摘しながら、「このことは、現在進行形の被災地の現状を、多くの視聴者の日常から切り離すことに役立っているともいえる。あるいは周年の節目報道が、結果として震災を過去のものとの印象を与える効果も否定できない」という（山田 2016:23）。日常における通時の震災報道が少なくなればなるほど、逆に周年の節目報道が目立ってしまい、出来事の非日常性が際立ってしまうという指摘である。

しかしだからこそ、こうしたテレビ・アーカイブの持つ意義は、ますます強くなっているともいえるのではないだろうか。テレビが描き、語ってきた震災がそのまま、人々が見聞きしてきた震災であるとするなら、アーカイブによってその経験を召喚し、「メディア環境において震災、原発事故の何が、どのように描かれ、語られ」てきたのか、「風化」の問題をも含めて検証することが、必要なのだとおもわれる（小林 2015:67）。

本稿はこうした立場に依拠しつつ、過去5年のなかで東日本大震災の語られ方が、テレビを通じてどのように変化していったかを考察するものである。法政大学環境アーカイブでは、2011年8月以来、SPIDER_PROという録画機器を使用し、震災関連の様々な番組を収集してきた。また、それに伴い、この機器の提供元であるPTP社から発信される番組のメタデータについても、震災関連のものはすべて保存している。今回はそのメタデータを利用しながら、徐々に焦点を絞っていき、実際のメタデータを参照しながら過去5年分のテレビの語りがどのように変化したのか、見ていきたいとおもう。具体的には、まずは保存してあるメタデータの概況を示す。そのうえで件数が目立って突出していた各年3月のメタデータを抜き出し、夜間帯のニュースを対象としながら、そ

*かとう てつろう 法政大学社会学部 兼任講師

こでの記述の特徴をあぶりだす。そうした過程を通じて、今度は実際のメタデータに当たりながら、5年に渡る震災報道の変遷について、考察してみようとおもう。

2. SPIDER_PRO メタデータの概況

ではまず、PTP 社 SPIDER_PRO が提供している震災報道に関するメタデータの概況からみていこう。SPIDER_PRO とは、約 2 週間分の地上波デジタル放送が全録可能なハードディスク・レコーダーのことであり、かつすべての番組に関するメタデータが PTP 社よりオンラインで提供される。

メタデータの種類には番組全体の概要を示したものと、CM のデータ、さらに番組を細かく内容ごとに区切った“コーナー”と呼ばれるものがある。また、全てのメタデータには「放送局」「開始日時」「終了日時」「番組内容」「出演者」の各項目が付与され、放送された番組全てのデータが配信される。さらに、こうしたメタデータの中から、検索キーワードを用いて放送内容を絞り込むことも可能である。

法政大学環境報道アーカイブでは、3・11 以降の震災・原発・環境問題に関連する 12 項目のキーワードを常時設置し、2011 年 8 月から現在まで、ニュース、ドキュメンタリー、バラエティなどの各種番組、およびそのメタデータを収集・保存している。

なかでも今回は、「復興」「震災」「原発」という 3 つのキーワードに絞り、それらが夜間帯ニュースの中でどのような推移で震災報道がなされているのかを見てみた（【図 1】）。唯一「原発」に関してのみ、福島原発問題以外にも様々な政策関連ニュースがその時々によって上げられるため、全体的な件数の傾向に多少のばらつきが認められる。しかし全体としてみると、震災 3 年後に行った西田善行（2015）や原由美子（2015）の調査と同じく、5 年後の傾向も、毎年 3 月という周期で報道が集中する「3 月ジャーナリズム」（「カレンダー・ジャーナリズム」「季節ジャーナリズム」）の傾向が読み取れる。そこで今回は、この 3 月という時期にのみ焦点をしぼり、夜間帯ニュースがそれぞれの年にどのような形で震災を取り上げているのか、見ていくことにしたい。

図 1 各キーワードにおけるメタ・データ総数の推移

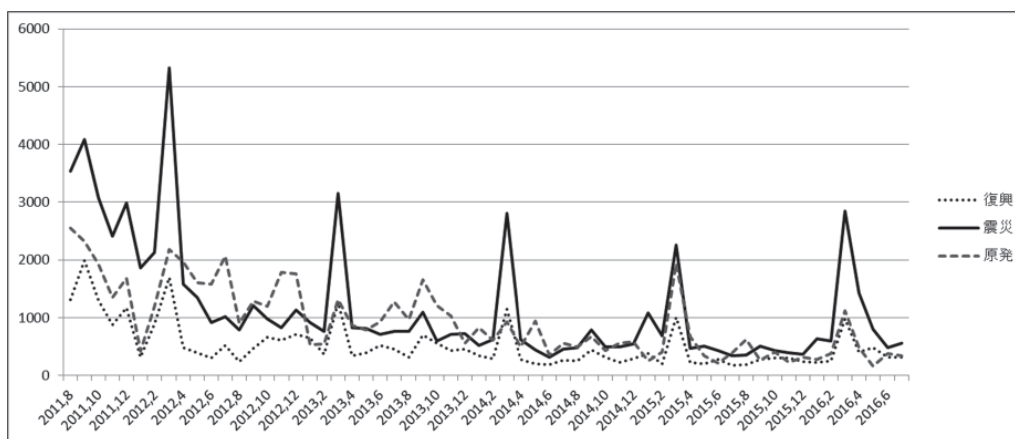


表1 各夜間帯ニュースにおけるキーワード検索の総数（2012 - 2016年3月）

	震災	復興	原発
NW9	220	72	147
ZERO	247	105	118
NEWS23 クロス	166	73	112
JAPAN	98	40	54
報ステ	114	34	144
WBS	97	48	42

3. 分析手法

分析に当たってはまず、SPIDER_PROのメタデータの中から、NHKに加えて在京キー局の夜間帯ニュースについて、2012年から2016年まで過去5年分、3月のものに絞って抜き出すことから始めた。それぞれ、「ニュースウオッチ9」「NEWS ZERO」「NEWS23」「報道ステーション」「ニュース JAPAN（現：あしたのニュース）」「ワールドビジネスサテライト（現：WBS）」である。これらのニュースからさらに、それぞれのメタデータを「復興」「震災」「原発」でキーワード抽出し、それらを分析対象とした。各ニュースにおけるデータの総数は【表1】のとおりである。単純にコーナー検索でヒットした件数をカウントしただけのものであるが、「原発」問題に関してのみ、報道ステーションが精力的に取り上げているものの、全体としてみればニュースウオッチ9、NEWS ZERO、NEWS23の3番組が震災関連のニュースを多く取り上げているのがわかる。

3-1. 共起ネットワーク分析

こうして抽出したデータを、今度はテキストマイニング・ソフトであるKH Coderにかけて解析を行った。とりあえずは6番組各3項目のデータごと、18のコーディングシートを作成し、個別に共起ネットワーク分析をかけてみた。

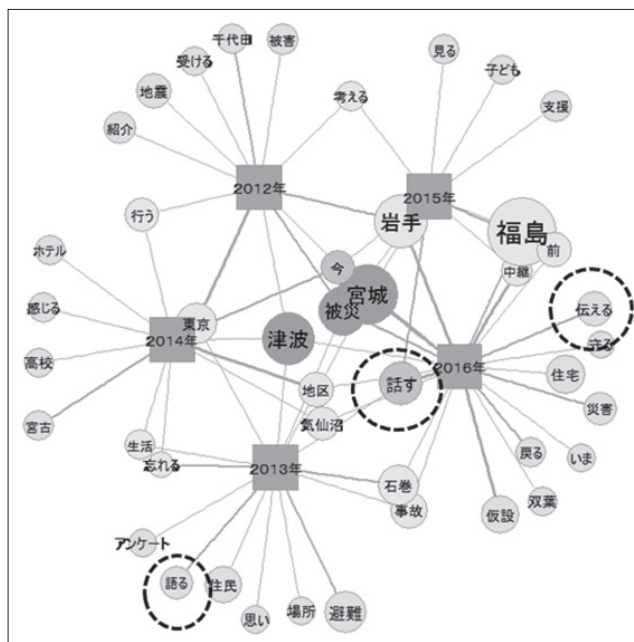
共起ネットワーク分析とは、分析対象テキストにおける出現パターンの似通った語（共起関係の強い語）を、図として可視化できるものである（樋口 2014：155 - 156）。すなわち、対象テキストにおいて共起の程度が強い語であるほど、強い線で結ばれた図として反映される。したがって作成した各コーディングシートをこの分析にかければ、それぞれのニュースが「震災」「復興」「原発」というそれぞれのテーマを、5年に渡ってどのような表現で構築してきたのか、その特徴と傾向がわかるはずだ。

結論からいうと、全てのキーワードに共通するような象徴的な事例は見つからなかった。しかし一方、いくつかのニュースにおいて「話す」「語る」「伝える」という言葉の表記関係に、特徴的な傾向がみられた。すべての共起ネットワーク図を例示するわけにもいかないので、とりあえずここでは各ニュースにおける該当コーナー件数をカウントしたものを載せておく（【表2】）。これを見ても、ニュースウオッチ9、NEWS ZERO、NEWS23に、しかも「震災」の項目に件数が集中しているのがわかるだろう。報道ステーションの「震災」「原発」に関しては「話す」という語が比較的多く使用されているものの、「語る」と「伝える」に関しては前の3つのニュースに比べて比率が圧倒的に少ない。したがって以下では、以上3つのニュースを対象に、「震災」カテゴリにおける共起関係について、図を用いながら検討していこう。⁽²⁾

表2 各番組・各キーワードにおける「話す」「語る」「伝える」の総数

		話す	語る	伝える
NW9	復興	45	15	13
	震災	105	50	62
	原発	86	23	34
ZERO	復興	47	18	29
	震災	96	43	71
	原発	43	14	25
NEWS23 クロス	復興	19	37	10
	震災	59	51	35
	原発	49	19	20
JAPAN	復興	30	14	5
	震災	48	18	14
	原発	10	2	1
報ステ	復興	21	11	1
	震災	85	30	9
	原発	65	11	12
WBS	復興	16	6	9
	震災	31	12	32
	原発	19	4	9

図2 ニュースウオッチ9の共起関係図



【図2-4】がそれぞれの結果である。まず、「話す」に関して、ニュースウオッチ9では2013～16年まで、線の強弱はあるものの継続的に共起が結ばれているのがわかる。特に、2015、16年のラインは太く結ばれている。そしてNEWS ZEROでは2013、14年に、NEWS23では2013、15年に強い共起がみられる。次に「語る」であるが、ニュースウオッチ9では2015～16年に、NEWS

図3 NEWS ZERO の共起関係図

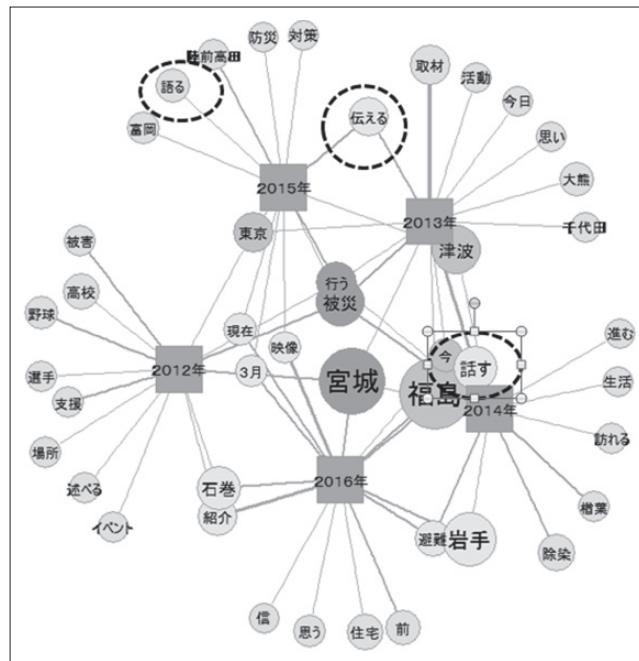
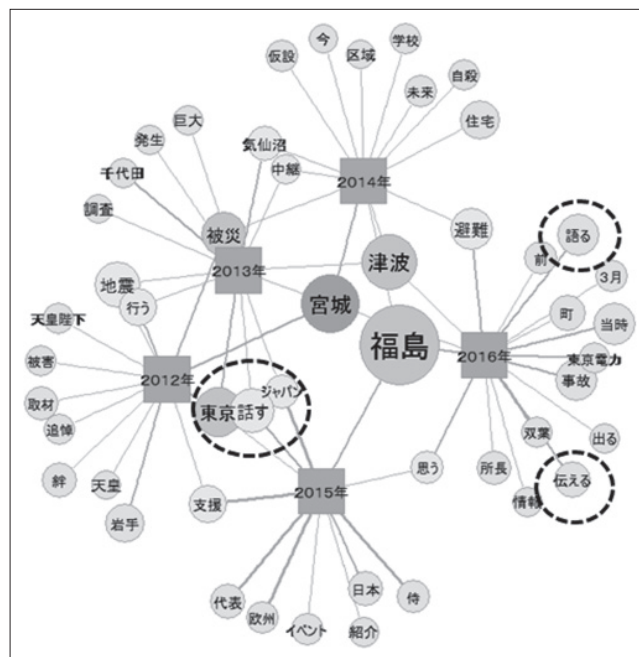


図4 NEWS23 の共起関係図



ZERO では 2013～14 年に、NEWS23 では 2013 年と 15 年に強い共起がみられるのがわかる。最後に「伝える」を見てみると、ニュースウオッチ 9 と NEWS23 は 2016 年に共起が顕著であり、NEWS ZERO では 2015 年に多く使われている。

つまり、3つのニュースにおける全体の傾向としては、「話す」という語は比較的早い段階から継続的に使用されており、「語る」という語は各番組によって分散的、「伝える」という語は 2015

年以降、特徴的に使われている語句として考えることができるだろう。

3-2. コード出現率とバブルプロット

では、「話す」「語る」「伝える」という言葉、あるいはそれらに意味的に関連しうる言葉は、それぞれのニュース内で一体どのような推移で使用されているのだろうか。

KH Coder には、任意であるコードを設定し、テキスト全体のなかで、そのコードに付与された語句がどのようなボリュームで使用されているのか分析する機能がある。言葉単体というよりも、もう少し大きな「概念・コンセプト・事柄」といったものが、全体の中でどのように推移しているのかを見るのにこの分析は適している（樋口 2014:44）。

ここでは、KH Coder に付随する抽出語検索機能を使用し、「話す」「語る」「伝える」、各語句に関連する言葉がそれぞれの番組中にどのような形で現れているかを調べた。そのうえで、こうした言葉を複数ピックアップして「概念」としてまとめた、以下のようなシートを作成した。これを外部変数として、先のコーディングシートにかけ合わせてやるわけである。

*話す

話す、話、話題、秘話、話し合い、話し合う、実話、話しかける

*語る

語る、語らい、語り合う、語りかける、物語る

*伝える

伝える、伝わる、伝う、伝承、語り継ぐ

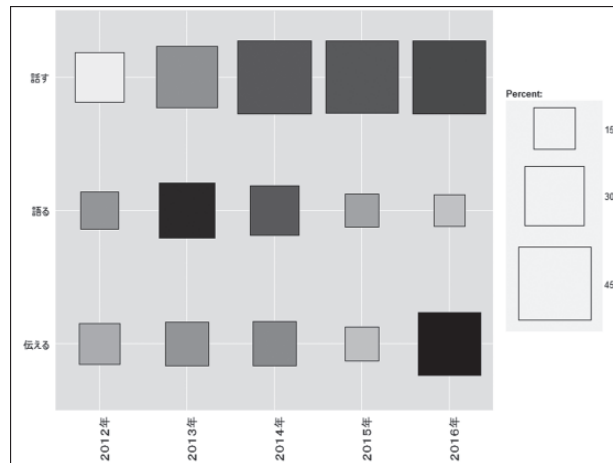
なお、動詞の活用に関しては KH Coder は自動で判別してくれる。また「語り継ぐ」という言葉は、本来は「語る」カテゴリーに出現した検索語句であったが、語意を考慮して「伝える」のカテゴリーに組み入れてある。

分析結果は、【図5-6】のようなバブルプロットとして現れる（それぞれの図に付された表は、バブルプロットを形成するもととなる実数での分析結果である）。バブルプロットはコードの出現率が大きいほど、つまり縦軸の関係で割合が大きいほど正方形が大きくなり、他の部分に比べて残差が大きいほど、つまり横の関係で特徴的であるほど色が濃く表示されるようになっている。各ニュースの特徴をみておこう。

◎ ニュースウオッチ9

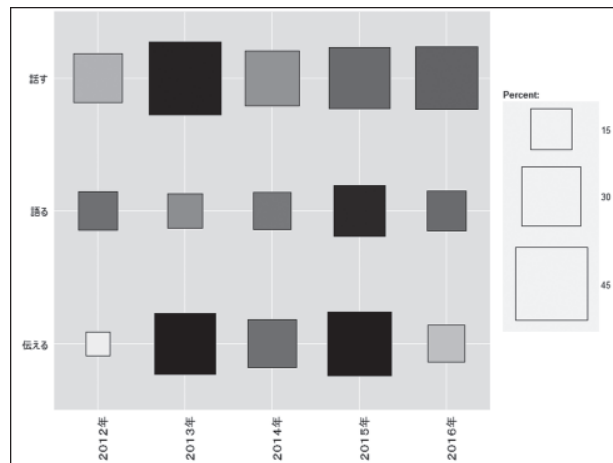
ニュースウオッチ9は例年、全体としてはほぼ似たような大きさの正方形がそろっている。それぞれのカテゴリーがバランスよく配置されているといえるだろう。つまり、言葉の使用頻度に関しては、毎年それほどの開きはないと考えて良い。一方、横軸については「話す」カテゴリーは2014年以降に使用頻度が上がっている。「語る」は2013年、「伝える」については、2016年に集中的に使用されている。

図5 ニュースウオッチ9のコード出現率とバブルプロット



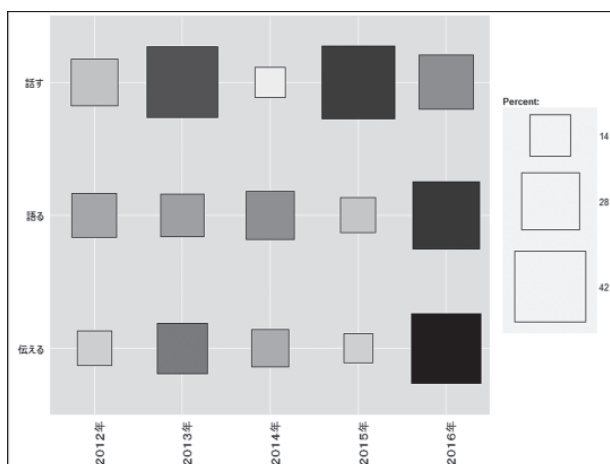
	*話す	*語る	*伝える	ケース数
2012年	12 (21.05%)	7 (12.28%)	8 (14.04%)	57
2013年	16 (32.65%)	13 (26.53%)	8 (16.33%)	49
2014年	11 (45.83%)	5 (20.83%)	4 (16.67%)	24
2015年	14 (45.16%)	3 (9.68%)	3 (9.68%)	31
2016年	27 (45.76%)	5 (8.47%)	20 (33.90%)	59
合計	80 (36.36%)	33 (15.00%)	43 (19.55%)	220
カイ2乗値	10.285*	8.74	11.199*	

図5 NEWS ZEROのコード出現率とバブルプロット



	*話す	*語る	*伝える	ケース数
2012年	8 (20.51%)	5 (12.82%)	2 (5.13%)	39
2013年	27 (45.76%)	6 (10.17%)	19 (32.20%)	59
2014年	13 (26.00%)	6 (12.00%)	10 (20.00%)	50
2015年	13 (32.50%)	9 (22.50%)	14 (35.00%)	40
2016年	20 (33.90%)	8 (13.56%)	7 (11.86%)	59
合計	81 (32.79%)	34 (13.77%)	52 (21.05%)	247
カイ2乗値	8.253	3.376	18.076**	

図5 NEWS 23 のコード出現率とバブルプロット



	* 話す	* 語る	* 伝える	ケース数
2012年	11 (18.33%)	10 (16.67%)	6 (10.00%)	60
2013年	8 (42.11%)	3 (15.79%)	4 (21.05%)	19
2014年	2 (7.69%)	5 (19.23%)	3 (11.54%)	26
2015年	13 (44.83%)	3 (10.34%)	2 (6.90%)	29
2016年	8 (25.00%)	12 (37.50%)	13 (40.63%)	32
合計	42 (25.30%)	33 (19.88%)	28 (16.87%)	166
カイ2乗値	14.498**	8.488	17.718**	

◎ NEWS ZERO

NEWS ZERO については、縦軸の関係でいうと「語る」が他に比べて若干比率がすくない（正方形が小さい）。しかし全体としてみれば語句の使用頻度じたいは均等な配分で使用されているといえるだろう。一方、横軸においては「話す」は2013年によく使われ、「語る」が2015年に多く使用されている。そしてそれらに付随するかのよう、2013年と2015年に「伝える」が多く使用されていることがわかる。

◎ NEWS23

NEWS23 に関していえば、縦軸と横軸ともに言葉の使用頻度にばらつきがあることが確認できる。縦軸でみると、2013年と2015年に「話す」関連の語句が多く使用されている傾向があり、横軸に注目すると、「語る」「伝える」は2016年に集中して使用されていることがわかる。

共起ネットワーク分析では、各年に特徴的な言葉をピックアップしただけであったが、このようにコード出現率としてみると、「話す」「語る」「伝える」、それぞれの語句は、割合としていけばほぼ例年均等に使用されているということがわかる。特徴的なのはむしろ、同じ語句の使用における、他の年度と比べたときの残差なのである。

4. 実際のメタデータから～それぞれの言葉の使用例～

4-1. 揺らぐ表記～キャスターのコメント～

では、この差には何か特徴があるのだろうか。それぞれの語句の使用頻度が年々変わっていく背景には、いったいどのような意味があるのだろうか。以下では、メタデータを読み込みながら、「話す」「語る」「伝える」それぞれの語句の使用例についてみていこう。実際のデータに当たってみると、キャスターのコメントを記述しているコーナーでは、例外的に各語句がやや不用意に使用されているような印象をうける。

【case.1】

- ・スタジオトーク▼スタジオで被災地の医療危機についてトーク。(略) アンケートによると、6割を超える人が震災が記憶から薄れているという。大越健介は、「忘れまいと言いつけさせることが大事」と話した。(ニュースウオッチ9 2013/3/4 21:38 63秒)
- ・スタジオトーク▼村尾信尚キャスターは被災地では震災の記憶が風化することを恐れているとコメント。右松健太キャスターは多くのアスリートが被災地支援を続け、風化を防ぐことに繋がっていると語った。(NEWS ZERO 2015/3/12 23:24 36秒)
- ・東日本大震災から2年、膳場貴子は今日の放送は気仙沼市(宮城)から中継で播磨卓士とお伝えすると伝えた。(以下略) (NEWS23 クロス 2013/3/11 23:22 191秒)

これは各番組のスタジオトーク、あるいはオープニングトークのメタデータの抜粋である。コーナーの時間(秒数)はそれほど大きくもなく、具体的な内容はさして無いが、逆にそれだけに、記述における語句の使用基準は曖昧なようだ。⁽³⁾

4-2. 現状を「話す」、理念化された想いを「語る」

「話す」と「語る」と「伝える」、三者の語感は似ているから、スタジオトークなどの短い枠でキャスターの行為を記述するのであれば、実際どの言葉を使用しても違和感はないと思われる。また、比較的多く時間を割いているコーナーでも、「話す」と「語る」は、比較的同じメタデータに併記されていることも多い。ただ、後者に関しては語句の使用に若干の区分があるようにも思われる。まずは具体例をみておこう。「話す」と「語る」の併記は、例えば以下のような記述にみられる。

【case.2】

<ニュース> “町を元気にするために” “100人の笑顔” 撮る高校生▼中心部のほとんどが津波の被害にあった大槌町(岩手)に住む高校生の釜石望鈴さんを取材。釜石さんは震災直後から町の風景や町の知り合いの写真を撮り続けている。▼釜石さんはNPOカタリバが授業料無償で開いている学習塾「大槌臨学舎」の高校生たちが町のためにできることを考えるプロジェクトに参加。カタリバの代表は釜石さんは震災前と比べコミュニケーション能力が発達していると話し

た。▼釜石さんは100人の笑顔というテーマを掲げ、つつみ乳幼児保育園で子どもらの写真などを撮影した。▼町が元気になることを望み写真を撮り続けている釜石さんは「笑顔の輪ができるようにみんなが笑顔になってほしい」と語った。

(NEWS23 クロス 2013/3/11 23:35 631 秒)

このニュースの焦点は震災直後から町の風景や知り合いの写真を撮り続けている高校生・釜石さんの活動である。その釜石さんの言葉には「語る」が使用されている。一方、釜石さんが参加しているNPOの代表の言葉には「話す」が使われている。どうやら、ニュースのテーマの中心となる主体の言葉には「語る」が使用され、それをとりまく第3者の、ニュースのテーマや主体の行動を補足する応答には「話す」が使われているようだ。「語る」という言葉が当該ニュースの主体に使われるという傾向は、複数の被災者たちの言葉に寄り添うように構成されたニュースになると、より強くなる。

【case.3】

<5年そしてこれから>各地で鎮魂の祈り 東日本大震災から5年▼東日本大震災から5年。宮城県南三陸町や石巻市や名取市閑上など各地で、鎮魂の祈りが捧げられた。妻と子どもを亡くした人は「妻には5年長く生きてますよと子どもには今年成人なのでプレゼント何がいい?って(風船に)メッセージを書きました」と語った。閑上中を卒業した人は「5年たって私たちは20歳になったけど震災のことは忘れずに亡くなった人の分までしっかり前向きに生きていきたい」と語った。女川町では息子を亡くした母が「たてばたつほど思いが深くなってとにかく会いたい。つらいつらい5年だった」と語った。仙台市若林区では慰霊塔を訪れた遺族が「いまだに悲しい、天国で元気にやっていますかっていうのと私たちも元気でやっているのでという報告」と語った。(以下略)

(NEWS23 2016/3/11 23:32 466 秒)

このニュースは震災5年をむかえた東北各地の鎮魂セレモニーを取材しながら、当事者たちのインタビューをつなげていったものであろう。その際、メタデータには一切「話す」は使われていない。当事者たちの現状を伝えるコメントを、カギカッコを用いながら示し、述語には「語る」という語句を連続して使用している。

では、中継現場に直接被災者を招いてインタビューするような場合、あるいはキャスターが現地に赴いて被災者とロング・インタビューをするような場合ではどうだろうか。ここでも、「話す」と「語る」とでは若干ニュアンスが異なる。ニュースウォッチ9から、次の2つのコーナーを挙げておこう。

【case.4】

<ニュース> “決断”と“分断” 震災3年 中継・福島▼福島飯舘村の区長を務めている鳴原良友さんと、長泥地区から生中継で当時の様子などを伝える。鳴原さんは、やはり長泥地区を去っていく人たちがどんどん増えてきて寂しい気持ちはあると話した。長泥地区で先祖代々続く「田植踊り」と呼ばれるお祝いの写真を公民館から拝借して紹介した。地域の人達を泥沼地区に繋ぎ止

める活動として、懇親会を行うことや区報作りでコミュニケーションを取るようにしたり、長泥の現状を伝えることに力を入れていると話す。(ニュースウオッチ9 2014/3/10 21:10 320秒)

【case.5】

<ニュース>東日本大震災3年 前に進むために▼たろう観光ホテルの松本勇毅社長が6階の部屋からインタビューに応じる。3年前の震災の際に今いる部屋に逃げ込んで難を逃れたという経験を持っている。津波の恐ろしさを伝える為の活動を行っている。▼震災遺構として残される「たろう観光ホテル」は訪問者がこれまで6万人が訪れている。松本さんは、ここから見た景色として津波の恐ろしさを見せる映像を流す。ここに来た人にだけしか公開していない。見た人は伝わるものがあった、学ぶ機会があってよかったと語った。▼たろう観光ホテルの松本勇毅社長は、1番伝えたいこととして、逃げるのができれば助かる人がもっといたのに逃げようとしなかった人が大勢いた事、恐ろしさが伝わったかどうかであり目に見えることが重要であると語った。メッセージを受けて次の対策へとつなげると語った。

(ニュースウオッチ9 2014/3/11 21:27 201秒)

上記2つの例では、中継インタビューの構成をとった同じ性質のニュースでも、その言葉のニュアンスに若干の違いがあることが確認できるだろう。case.4は飯舘村の区長が長泥地区から人が去っていくことへの寂しさ、続いてそうした人たちをつなぎとめるための努力が報じられている。一方case.5では、よりシリアスな記憶と記録をどのように伝承していくかについて報じることがテーマである。その際、前者が、地区に人をとどめるための努力を、区長自身の私感として述べているのに対し、後者は、震災遺構の運営の意味をどのようなところに位置づけるのか、よりパブリックな問題に言及されている。“訪問者”のやや雑感的な「語り」も、最後の「次の対策へとつなげる」「語り」と呼応してのことであろう。こうした違いの中で、「話す」と「語る」は使い分けられている。

ところで、辞書を引くと「話す」と「語る」には、次のような違いがある。「話す」の意は「談話する」ことであり、「口に出して述べる」こと。そして「語る」の意は「物事を順序だてて話して聞かせる」こと。⁽⁴⁾このことを考慮すれば、これまで検討してきたcase.2からcase.5、それぞれの記述のあり方がより理解できるようなるだろう。つまり、現状での奮闘話や苦労談、あるいはテーマに関連する雑感を述べるさいは「話す」が用いられ、出来事の記憶を人がいったん引き受け、自分のなかで飲み込んで理念化された想いを述べる時、あるいは震災遺構などの対象物を前に、それに対する想いを述べる時、「語る」が使用されているのである。

4-3. 時間経過とともに変わる「伝える」

それでは、「伝える」はどうか。本稿はこれまで、この語義についての定義には触れずにおいた。ところが「伝える」という言葉の語義を調べてみると、「移行のなかだちとなることに重点をおく場合」と「渡しやる方に重点をおいて用いる場合」の、二つのケースがあることに気づく。前者の場合は「言葉を取りつぐ／伝言する／なかだちをする」というような語義となり、後者は「後代まで言い知らせる／語り継ぐ／言い残す」という語義となる。⁽⁵⁾実はメタデータをよく読み込んで

みると、東日本大震災以降、年を追うごとに、「伝える」という言葉のニュアンスに、ある意味変化が生じていることに気づく。

【case.6】

＜“被災地の今” 伝える大学生＞“被災地の今” 伝える大学生 ▼環境省が（略）整備を計画している「東北トレイル」のモニターとしておよそ700kmを歩く早大生の後藤さんに（略）取材を行った。後藤さんは環境省のHPで地元の人との交流、現地の食べ物等をブログで発信している。（略 - 後藤さんは）津波被害が残る歌津大橋や伊里復興商店街を取材。「歩いていくなかで東北の人たちの励ましのメッセージが原動力になっている。」と後藤さんは話した。 ▼志津川・袖浜漁港で後藤さんはわかめをとる漁師を見かけると話しかけた。「まだ震災前の状況に戻るのには難しい」という声も聞こえ、「2年たっても場所によって復興の進行に開きがある」と後藤さんが語った。（以下略）
（NEWS ZERO 2013/3/5 23:14 439秒）

【case.7】

＜震災 あの日から5年＞命を守るために語り継ぐ ▼岩手県宮古市田老地区より中継。津波で大きな被害を受けた、たろう観光ホテルはそのまま残されている。災害から命を守るために何ができるのか、震災の教訓を後世に伝えるため何をすべきか考える。ゲストの伊勢谷友介は災害との向き合い方が大きな試練となって与えられていると話した。
（ニュースウオッチ9 2016/3/11 21:04 166秒）

＜震災 あの日から5年＞命を守るために 遺構で知る“あの日” ▼災害の記憶を後世に伝えるために震災遺構として一般に公開される「たろう観光ホテル」を伊勢谷友介が訪れた。田老地区で震災の教訓を伝える活動をしている元田久美子さんは4月からホテルでもガイドとして活動する。たろう観光ホテルの経営者がホテルの6階から津波を撮影していた。そとのとき撮影した映像は田老を訪れないと見ることはできない。（ニュースウオッチ9 2016/3/11 21:14 331秒）

case.6は2013年のデータ、case.7は2016年のデータである。前者には「伝える」という語句はあるものの、それはタイトルのみで本文には一切出てこない。また内容を確認すると、後藤さんという大学生が被災地を訪れ、現状を“伝えて”いるというものになっている。したがってここでの「伝える」の語義は、当の出来事を人から人へ「なかだちをする」という意味として理解できるだろう。つまりこの段階、2013年の段階では、復興への道筋はまだ中途であり、このニュースはその現状を「伝え」ようとしているのだ。

一方、case.7では冒頭でいきなり「語り継ぐ」という語句が登場する。またその内容も遺構やガイドを通じて、震災の「記憶」や「教訓」を「後世に伝える」ためとなっている。つまり、ここでの「伝える」の語義は「後代まで言い知らせる」方のニュアンスが強くなっている。これは、なにもcase.6とcase.7の単純な比較では収まらない。case.7のニュースは岩手県宮古市田老地区が舞台だが、ニュースウオッチ9はこの“たろう観光ホテル”を、実は過去にも取り上げている。それがcase.5である。

いま一度、case.5を確認しておこう。case.5では、ホテルの社長がインタビューに応じるという構成をとる。取材を受けているのは、震災当時、社長自らが逃げて助かったホテルの6階であり、ホテルを震災遺構にした理由を、「津波の恐ろしさを伝えるため」と語る。そしてその「伝える」相手は、ホテルを見学しにきた「訪問者」たちであり、現場で映像を見せることで、「目に見えるかたちで恐ろしさを伝えることが「重要」だと述べる。つまり、当事者と訪問者が空間を共にし、生々しい震災の出来事を現場で分かち合うことに重点がおかれているのだ。

しかしcase.7は違う。結論からいえば、震災はすでに過去のものとなっている。過去にあった出来事を「記憶」に残し、「教訓」として「後世に伝える」ため、それを考えるためにニュースが構成されている。芸能人という第三者を配し、感想を述べさせ、(当事者ではない我々の)「試練」として、震災遺構をどう捉えるかということに主題がおかれている。そこでは、当事者性は一般化へとむかう一方、震災の生々しさ、目に見える形での「恐ろしさ」を現場で共有することの重要性は薄れてしまっている。

こうした事例の中に、先のテキストマイニングで得られた知見を重ね合わせることはできないだろうか。つまり、東日本大震災という出来事と、それを体験した我々自身が抱く生々しさは、年々風化してしまっている。それが、メタデータの表記にも現れる。もちろん、それぞれのニュースにおいて使用される語句の傾向に違いはある。「話す」という語句は使用法も広範囲にわたるので、当然その使用傾向は各ニュースをみるとばらつきもみられる。しかし、「語る」「伝える」という表記が、全体的に2015年、2016年に集中していたことを思い起こそう。震災の記憶を抽象化して振り返る意味で「語り」、それを後世に「語り継ぐ」ために「伝える」。こうした語句が年を重ねれば重ねるほど多く使用されるのは、震災の経験をとらえる報道のあり方、そして我々自身の感覚が変化してきたからなのではないだろうか。「話す」から「語る」へ。そして「語る」から「伝える」へ。ちょっとした語句の、単なる言い回しの違いではあるが、それらの言葉の使用量と使い方を順に追っていくと、同じ震災の報道においても、その内容の変化、アプローチの仕方に変化が読み取れるのである。

5. おわりにー課題と展望

以上、本稿では2012年から16年の夜間帯ニュースにおける、東日本大震災関連の報道を3月分のみ抜き出し、とりあえずそのすべてのメタデータを対象としつつ、徐々に焦点を絞って分析を行ってきた。まずは、それぞれのニュースで各年における特徴的な語句を抽出した。ここでは、各ニュースによって違いはあるものの、ある年との関連の中で、「話す」「語る」「伝える」という3つの語句に対する強い共起関係がみられた。次に、コード出現率を分析することによって、上記3つの語句がどのような経緯で使用されているかを調べた。結果、それぞれ上記3つの語句を使用していない年はないものの、ある年によって語句の使用に特徴的な年があることが確認された。その上で、実際のメタデータに当たったところ、微妙な差異ではあるが、それぞれの言葉の使用法に違いがあることが確認された。これらの分析をもとに、ここでは最後に、今後の考察への課題と展望を示しておきたいと思う。

第一に、本稿の分析対象がメタデータであったことは考慮に入れておくべきだろう。メタデータは、あくまで番組内容の要約であって番組そのものではない。三浦伸也も指摘しているように、こ

うしたメタデータを使用した分析では、「特定の言葉がいつから使われるようになったのか、もしくは使われなくなったのかなどは把握できるが、専門家や解説者の言い回しややりとり、報道の『蛇行』や『ブレ』は分析できない」（三浦 2012：108）。

本稿が取り上げたテーマは、この三浦の指摘を甘受せざるをえない。「話す」「語る」「伝える」という語句は、まさに三浦のいう「言い回しややりとり」に関連する部分であるからである。また、加えてメタデータを作成するコーダー（記録者）の恣意性にも考慮しなくてはならないだろう。メタデータを作成する際、地名や団体・企業名などの用語の統一基準はあっても、映像に写る人々の動作や態度、口調にまで細やかな基準が定められているかは不明である。⁽⁶⁾ましてや、流れてくる映像を常に注視しながら、述語に関する部分にまで配慮して記述を統一させるには、コーダーの熟練も必要となるだろう。このような事情をふまえると、本稿が行ったメタデータの記述分析は、確定的な論拠はなく、“仮説を構築していくための試論”として措定せざるをえない。

しかし、だからこそ第二に、こうしたメタデータの分析は、実際に映像を分析する前段階において、その対象選択を広範囲かつ長期的なスパンの中で成立させてくれる可能性もある。これまでのテレビ・コンテンツにおける言説分析というものは、分析対象の代表性に関していえば、研究者個人の手腕に委ねられることが多かったように思う。それは録画機器のキャパシティーの限界や、ある対象にむけてそのすべてを網羅的・系統的に把握するのは、個人の、研究者一人の力では、その作業量が膨大すぎたからであろう。

しかし、メタデータを用いた分析はそれが比較的容易である。今回の分析も、過去五年分のメタデータの集積・整理から始まり、3月のデータのみ限定したうえで、各夜間帯ニュースで使用される語句の相違点を抽出、そこから「話す」「語る」「伝える」という、それぞれの語句が使用される際の傾向について考察してきた。こうした手順を踏めば、分析対象となる映像の選択基準も、明示的に、かつ客観的に模索することができるだろう。

したがって第三に、次の展望として、こうした考察にもとづいた実際の映像分析も行っていく必要がある。膨大なデータを一定の手順にそって絞っていき、最終的に実際のメタデータに当たってみると、そこには映像に写る人々の“語り”の位相が、わずかながらにも見えてきたように思える。「話す」とことと「語る」とこととの違い、それから「伝える」という語句における時系列的な意味の変化。また、分析を進めていく中で「震災遺構」という具体的なトピックも見えてきた。こうしたキーワードを手掛かりとして、今度は実際の映像を分析したうえで、本稿の考察にフィードバックすることも可能であるだろう。従って筆者の次の目論見としては、今回の考察を元にした映像の詳細な分析ということになるが、それについては今後の課題として、稿を改めて検討したいと思う。

注

- (1) 筆者が確認したものとして、初期報道における研究として遠藤（2012）、伊藤（2012）など、比較的ながいスパンでの研究は三浦（2012）、松山（2012）をあげておく。また、震災後3年の節目において、テレビ・アーカイブのメタデータを使用しつつ、総体的な分析を行った研究としては、原（2015）、西田（2015）がある。
- (2) とりあげる共起ネットワークの代表性について。本稿でとりあげた3番組について、NEWS ZEROに

については「復興」「原発」にも同じく「話す」「語る」「伝える」という語の共起関係が認められた。ただし、後に実際のメタデータに当たってみたところ、「震災」ですでにとりあげられているものと重複している場合も多く、今回は「震災」一本に絞った。また、報道ステーションにおいては「震災」における分析に「話す」が共起関係として現れてはいたものの、「語る」「伝える」に関してはネットワーク図にすら現れてこなかったため、今回の分析対象からは外してある。

- (3) 語句使用の判断基準について。今回の分析は、5年分のメタデータの中から、「話す」「語る」「伝える」それぞれの語句が一回でも入っているものはすべて抜き出し、ひとつずつ読み込みながら、代表的なものを抽出している。ただし分析作業をするなかで、筆者一人の解釈だけでは、正直判断に迷うようなケースも多かった。今後このような研究をすすめていくのであれば、方法論としては複数人のコーダーによる判別を行うべきかもしれない。
- (4) 小学館 日本国語大辞典を参照。
- (5) 同辞典を参照。
- (6) 筆者は参加できなかったが、震災映像アーカイブ研究会では、SPIDER_PROを提供しているPTP社長、有吉昌康氏にリスニングを行っている。取材者の報告によれば、PTP社の場合、メタデータの入力規則・マニュアルは自社で作成しており、固有名詞のチェックなどはコンピューターも用いて行っているとのことである。データを作成するさい重要なのは、固有名詞の記述を統一することあり、また、キャスターやコメンテーターの意見なども、詳細に記述するよう心掛けているらしい。そのさい、データ記入に関しては極力記入者の解釈は入れないようにしているということである。それ以上の報告は受けていないが、「極力解釈は入れない」ということであれば、今回本稿が取り上げた対象のように、データを書き添っていく作業の中では、述語使用に関して記録者もそれなりの配慮をしているのかもしれない。

参考文献：

- ・遠藤薫 (2012) 『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか：報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』 東京電機大学出版
- ・原由美子 (2015) 「震災後3年間 テレビ番組で何が伝えられてきたのか——ドキュメンタリー番組に描かれた被災者・被災地」『NHK 放送文化研究所年報 2015』 pp7-47
- ・樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版
- ・伊藤守 (2012) 『ドキュメント テレビは原発事故をどう伝えたのか』、平凡社
- ・小林直毅 (2015) 「解題：震災、原発事故とメディア」『サステナビリティ研究 Vol.5』、法政大学サステナビリティ研究所、pp67-70
- ・松山秀明 (2013) 「テレビが描いた震災地図——震災報道の「過密」と「過疎」、丹羽美之・藤田真文編『メディアが震えた The Media Quaked：テレビ・ラジオと東日本大震災』、東京大学出版、pp73-117
- ・三浦伸也 (2012) 「311 情報学の試み——ニュース報道のデータ分析から」、高野明彦 吉見俊哉 三浦伸也 『311 情報学 メディアは何をどう伝えたか』 岩波書店、pp33-114
- ・西田善行 (2015) 「テレビが記録した「震災」「原発」の3年——メタデータ分析を中心に」、『サステナビリティ研究 Vol.5』、法政大学サステナビリティ研究所、pp125-143
- ・山田健太 (2016) 「震災・原発報道における情報の空白と偏在」『GALAC 2016年6月号』 放送批評懇談会 pp22-25